

Elizabeth Gaskell の *Ruth*

ヴィクトリア朝社会の現実（その2）

中 村 祥 子

Ⅲ. *Ruth*—人間的成長を遂げ得た犠牲者

1.

或る批評家が、「Gaskell は幾つかの小説の中で労働者の生活をリアルに描いている」と指摘する時、その批評家がそこからどういう結論を導き出そうとしてそう言うのかには、注意を払う必要がある。Gaskell が「1840年から1850年にかけて、・・・（イギリスの）産業問題に触れた」¹作家（呼び名が何んであれ）であることは何人も否定できないのだから、ただ問題は、その事実をどう評価するかという点が個々の批評家に任されていることになるからである。

この点についての議論は、特に彼女の社会小説と称される一連の作品について、これまでも数多くなされてきているけれども、その場合に多くの批評家達が陥りがちな落とし穴があるように思われる。つまり、Gaskell の労働者へのこの関心を、何か非常に特殊なものと考え、そういう世界はいやしくも芸術の対象として取り上げることが適切だったのかどうか決定しかねるというような迷いが批評家の側にあり、それがともすれば彼女の小説を問題小説とかプロパガンダの手段という特別なジャンルでのみ考察し、芸術作品としては真面目に扱おうとはしないという自らの批評態度を正当化することにつながる危険性である。それは彼女のこの一連の小説に批判的である批評家達だけの陥りがちな落とし穴ではなく、それらに好意的な批評家達もそこから完全に安全であるとはいかぬように思われる。例えば彼らが労働者の悲惨に対して作者が無関心ではいられなかった点を高く評価する時、そうしたテーマがヴィクトリア朝初期

の工業地帯に於る社会通史として見た時価値があると言っているのか、それとも小説として価値があると結論しようとしているのか、決めかねるというような混乱が彼らに起こりがちなのである。

Gaskell が労働者の生活を描いたこと、それも単に時代背景として小説世界に持ち込むのではなく、² 彼らを主人公として登場させたということは、イギリス小説史の中で一つの新機軸をなしていることは事実である。しかし彼女のこの関心を余りに特別視し、彼女の視点を限定して考えることは（賞賛するにせよ批判するにせよ）誤りであるように思われる。彼女は *Mary Barton* (1848) を書いた時、序文で次のようにその動機について述べた。

三年前私は小説をひとつ書きたくなった。…私の物語の背景をどこか田園的風景にとろうと思い立ち少し作をすすめたのであった、年代は一世紀以上も昔、場所をヨークシャーの辺境にとったのだが、考えてみると現に住んでいる町の繁華な通りで日々出会う人々の生活の中にある物語がいかに深刻なものかということに思いあたった。一生を通じて労働と窮乏のあいだを奇妙に往来して苦闘する運命にある必配寥れした人達、他の人達と比べてずっとはげしく境遇にもてあそばれたような人たちに私は常に深く同情していた。…富裕な人々—— わけてもその富を築くのに手を貸してやった雇主たちから、彼等が蒙った不当な措置に対して彼等がなす抗議が十分根拠あるものか否かは私の判定するところではない。マンチェスターのいく多みじめな無教育な工場労働者にあっては、彼らの同胞からこのように不法且つ不親切な行為を受けているという信念が、神の意志としてあきらめられそうなことをも赤い色をつけて復讐にまで持って行かせるのだとしか私にはいえない。³ …私は経済学も貿易論もまったく知らない。事実ありのままに書こうと努めた。

ここで明らかなように、彼女は「現に住んでいる町」で直面した現実世界を、「事実ありのままに書こうと努めた」に過ぎない（と言って、決してそれを過少評価しているのではないが）。つまり彼女の住んだ時代と社会とが彼女に見せた真実の姿とは、「富裕な人々」と「労働と窮乏のあいだを奇妙に往来している人々」との二つの階層があるという現実であり、様々な不幸な事件がこの現実から生み出されているにもかかわらず「彼ら労働者たちは歎こうが泣こうがなんら捨ててかえりみられない状態にある」⁴ ということであったのだ。一方に富んだ人々がいて、他方に貧しい人々がいる、それもまるで「大工業がイギ

リス人を二つのちがう国民に分裂させた」⁵かのようなことに気付いていた作家は、Gaskellに限らず当時の小説家達の中には他にも数多く居た。それは余りに否定しようのない事実であり、作家はそれぞれのやり方で、その現実を小説世界に展開している。

Gaskell が労働者の生活を描いたということは従って作家に時代の真実を見る目を要求する限りむしろ当然のことであって、この素材の特殊性はたとえば Jane Austen が地方地主階級の生活を描いたと言われる時のその素材の特殊性と同じ度合いに於て重要な意味を持つのだといえる。

むしろ Gaskell の特殊性は、この素材の扱い方の中に存在している。*Ruth* について「ギaskell は中心人物として墮落した女性を扱った、19世紀イギリスで最初の作家である」⁶という事実がしばしば指摘されるが、そこには Gaskell が労働者達の生活をどのようなやり方で扱ったかを暗示するものが含まれている。一つは主人公として、ということである。彼女の長編の処女小説とされる *Mary Barton* に於てもそうであった。しかしながら少し考えてみれば「墮落した」或いはその危険性のある女性であるという条件を付けたにせよ（それはしばしば労働者や貧しい人の娘であるのだが）、そういう人物が作品の中で主要な場所を占めてきたというような小説は18世紀にイギリス小説史が始まって以降でもそれ程目新しいものではない、とすぐに気付かされる。何故なら18世紀に限っても *Moll Flanders* (1722), *Pamela* (1740), *Clarissa* (1747—8), *The Vicar of Wakefield* (1766) 等々幾つでもそうした小説を挙げることができるように思われるからである。

19世紀に入れば勿論もっと数多く挙げられるだろう。

ベッキーのディレンマ——またその限りではアミーリアのディレンマでもある——は、『エマ』におけるジェイン・フェアファックスのディレンマだし、モル・フランダース以降のイギリス小説の、ほとんどすべての女主人公のディレンマなのである。活気と知性にあふれた若い娘は、このブルジョア社会というお上品だけれど残忍な世界の中で、なにをなすべきか。二つのコースしかない。受動的な、屈従に甘んずる道か、積極

的な、独立叛逆の道か、である。妥協による解決の希望があるとすればそれはただ、ダーシー氏とかナイトリー氏のような理解のある男、教養の価値を買うことのできる金と、またそれを求めるほどのやさしさとをもった男に運よくぶつかることである。⁷

Arnold Kettle は *Vanity Fair* (1847—8) の主人公達についてこのように分析しているが、18世紀から19世紀にかけてのイギリスという階級社会の中では、上流階級に「運よく」生まれなかったけれど、「積極的な、独立叛逆の道」に進んだ、しかも「活気と知性にあふれた若い娘」は、Ruth 以前にも一つの系譜をなし得る程に存在したであろう。彼女らの「独立叛逆の道」はたいてい結婚という手段を通してであったから、失敗すればたちまちRuth のように墮落という烙印を押される危険性も非常に大きかったわけである。(そして「運よく」中・上流階級に生まれたら、彼女らの「独立叛逆の道」はまた別な種類の悲劇になった。) だからそれぞれの時代の作家達がそれぞれのやり方で彼女達の生き方を描いたということは、イギリス小説史のリアリズムの伝統から見れば当然のことであっただろう。

従って Gaskell がそういう人物を主人公として描いたということだけなら、それはそれ程新しい視点でもなかっただろう。しかし、彼女は人間的で幸福な生活を、究極的にその人物の属している階級、つまり労働者達の生活の中で達成させようとする人物を創造した。たとえば *Mary Barton* の Mary は Jem Wilson と結婚することによって幸せになり得た。そして Gaskell の視点の新しいさはこの点にこそ存在するのだと思われる。

他の多くの作家達は自分の女主人公達を何とか上流社会に入りこませることによって彼女達の幸福な人生を保障してやろうと努力した。「積極的な、独立叛逆の道」を社会的地位の昇進の中に求めたのだ。勿論、階級社会の現実にとたび気付いた作家なら誰でも、中産階級社会や上流社会以外の世界とはいかに人間的な生活が物質的に厳しく制限され、ほとんど拒絶されていると言ってもいい程にひどい所であるかを知っている。彼らの主人公達はその出身階層が貧しければ貧しい程、またはそこに転落する危険性が大きい程、—そして次の点は大

事なことだが一より人間的な生活をしたいという当然な望みを抱くに充分なだけの自尊心があれば、有産階級社会へのしがらりと苦闘せざるを得ないのだ。

『もしもジョゼフ・セドレさんがお金持で、まだ独り身なら、あたしが奥さんになったって別に悪いというわけはあるまい。… 』 … 誰一人構ってくれ手のないレベッカも、お婿さんを得ようと決心していた。身寄りのない彼女にはアミーリャによりも、もっとお婿さんが必要だったわけだから。⁸

という野心（と Joseph Sedley の両親には見做されるのだが）を一貫して持ち続けて、Rebecca は彼女の人生を生きていくのであるし、*Wutherng Heights* の Catherine は、

「… ネリィ、あたしをひどく身勝手な女だと思うでしょう。でも、もしヒースクリップとあたしとが結婚したりしたら、ふたりがこじきになってしまうということにあんたは気がつかないの？ … 」⁹

という言葉を残して金持の Edgar と結婚するのである。¹⁰

しかし Gaskell は労働者達の人生を人間性の点で高潔なものであると見做し、この高貴な人間性の完全な発露を妨げているものをこそ問題にすべきだという形で、この階級社会の女性が遭遇した難問を解決しようとする作品を幾つも描いている。勿論他にもたとえば Dickens が下層階級の人々の中に様々な人間的な性格を持った人物を見出し、彼の小説の中に彼らを生き生きと登場させたということは事実である。しかし彼の小説の貧しい主人公達には、結局は何かの偶然のために自らがブルジョアジーの一員になることによって幸福が保障されているという筋が非常に目立つのである（*Oliver Twist*, *Little Dorrit* 等）。

それに対して Gaskell の貧しい者達への信頼感はもっと徹底している。そしてそれは彼女がどういう種類のリアリストであるかということ、つまり彼女のリアリストとしてのタイプを規定している。彼女の小説では多くのヴィクトリア朝作家の場合とは違って、貧しい主人公達に突然遺産を残してくれる遠い親戚がいたり、結婚するという真面目な意図を持って近づいて来るお金持ちの独身の男性が現われるということは起こらないように思われる。

Gaskell の経済観念を大変よく表わすエピソードが *Ruth* の中にある。Mrs. Bellingham が Ruth に与えた手切金50ポンドをめぐって Benson 兄妹がかわす会話である。

“I suppose it is (hers); and, being so, we must not think who gave it to her. It will defray her expenses. I am very sorry, but I think we must take it.”¹¹

(「私はその金は彼女(ルース)のものだと思う。そしてもしそうなら、我々は誰がそれを彼女に与えたのかなど考えてはいけないのだ。彼女の費用はそれで支払えるだろう。残念ながら我々はそれを受け取らねばならないのだと思う」)
Gaskell にとってはどんな小さな善行も単なる善意だけでは成立しない。それはもっと現実根ざした、具体的なものである。しかもこの50ポンドはRuthが使うのではなく、Benson 兄妹を通して使われることによって(“They don’t deserve to have the power of giving: they don’t deserve that you should take it.”(p.126) (「彼ら (ベリングラムさん達) は人に物を与える権利を持つに値しません。あなた (ルース) がそれを受け取ってやるだけの価値はあの人達にはありませんとも」)) という文章が示しているように) この小説全体のテーマと矛盾することもないのである。

Charlotte Brontë は *The Professor* (1857) の自序で次のように述べた。

私はこう考えたのである。——私の物語の主人公は、現実の生きた人間たちのように、勤労によってこの世を渡っていかなければならない——自分で働いて得たものでなければ、一シリングの金も身につけてはいけない——運命の急転によって、一瞬にして富を得、高位につくが如きことは、許さるべきではない——いかに僅かな資産といえども、額に汗して得なければならぬ … と。¹²

Brontë 自身が自分の作品に常に厳密な態度でこの法則を適用したか否かの穿鑿は今のところ問題ではない。いづれにせよ、彼女のこの勤労尊重の精神がしばしば「自活できる唯一の方法」¹³として教職につくことを彼女の主人公達にごく自然に考えさせたのだということを確認しておけばよいであろう。そして、そうした生活こそが「現実の生きた人間たち」の生き方であると、このヴィクトリア朝作家も感じていたということ。

Brontë の表明しているこの現実らしさという観念を、最も厳密な意味で自らの小説に適用しているのはむしろ Gaskell であったと思われる。つまり彼女のリアリズムはそういう種類のリアリズムなのである。働くということが悲惨なイメージと直結するのではなく、むしろ神聖な意味を持ち得る可能性を現実世界の中で彼女は最大限に追求しようとしている。彼女の小説に出て来る貧しい人間達は、従って働くことを当然視し、だからといって人間性の点で劣った者でもないし、その点での哀れみや同情をかけられるべきものでもない。逆に彼らは、「(ブルジョアジーの) 怠惰な貴婦人のようになるよりは額に汗してパンをかせぐ」¹⁴ 娘になることの方が聖書の精神にかなっているのだと、誇りを持って言うような人々である。*Ruth* は〔Ⅱ・〕で見たように、「道に迷った、墮落した」娘が本当はどういう人物の犠牲者であるかをリアルに描いた作品であるけれども、同時にこれは *Ruth* という貧しい女性のこういう側面での人間的成長を描いた小説でもあるのだ。

ところで、*Ruth* に関して、「もし *Ruth* が犠牲者なら彼女は償いをする必要がある者として書かれているのは矛盾している」とか、「逆に後半生の聖女のような生活が可能な女性なら初めに『墮落』したはずがない」としばしば非難される。そしてそれは *Ruth* のテーマの一貫性の無さとして指摘されている。たとえば次のように批判される。

私たちが彼女の本の中で反論しようと思うのは次のことである。つまりルースの過失に言及する時、ルース自身によっても彼女の友人達によってもいつも習慣的に使われている調子や(罪人という)言葉は、この(ルースよりブラッドショーの方が遥かにひどい罪人だという)印象と相入れず、記述されている事実の真の主旨とも相入れないということである。ギaskell 夫人はこの点では自分自身の気持をほとんど整理できていないように思われる。つまりルースのような類の犯罪者に対する無慈悲でむごい世間に、もっとやさしい感情を呼び起こしたいということ…を何よりも強く望んで、彼女は詩人が空想したような純粹で敬虔で没我的な一人の人物をまず最初に想像し、墮落についてもそういう過失の可能な限りに過失性の少い純潔から起ったものと描写したのだった。それからぶちこわしになるような、誠実さの無い矛盾した態度

で、その犯された罪は余りにも色濃くしみついているので償いと忍耐がいつまでも続く一生のみがそれをぬぐい去ることができると断言し、そういう問題についての世間の評価に譲歩したのだ。¹⁵

作者は全く無垢な主人公を選んだ場合に起ってくる芸術上の問題——特にそういう場合に「罪」が現実のものと、識別力のある読者に納得させ得るばかりでなく、それを有罪とすることの適切さと、宗教上の償いや社会的復権の必要性とについても推測によって納得させねばならないという問題を、十分に予知することはできなかった。¹⁶

しかしこういう批評は、Gaskell のリアリストとしてのタイプを見誤っている。Ruth は犠牲者であり且つそういう状態から立ち直り得た女性なのである。この二つの現象が Ruth という一人の人間の人生に起ったとしても、Gaskell の人間観からすれば少しも矛盾したことはなかったであろう。Ruth の後半生を作者は確かに償いという言葉で表現しているけれども、現実には小説で展開されている Ruth の半生は人間的な成長であり向上である。そしてその調子は *Tess of the D'Urbervilles* (1891) の主人公の苦闘と非常によく似ている。人生の初期に犠牲者になったとしても、それでも生きていかねばならないではないかという「現実の生きた人間たち」、それも犠牲者になりやすい側の人間たちに負わされた宿命を、これらの女性達は等しく表現している。¹⁷

しかしながら貧しい者達への Gaskell のこの信頼は、必らずしも彼らの生への活力を賞賛するところからだけ、出て来ているのではない。それはしばしば人間は自らの分に応じた務めを果さねばならないという彼女の観念からも出てくる。そしてそれが彼女の世界観の限界として立ち現われる時には、ブルジョアジーへの甘い期待と相まって、彼女の小説世界を非常に衝撃力の弱いものにしてしまう。

たとえば召し使いの Sally が、彼女の尊敬する亡き Mrs. Benson から若い頃次のように叱られたことを思い出す場面がある。

‘ … well, your station is a servant and it is as honourable as a king's, if you look at it right; you are to help and serve others in

one way, just as a king is to help others in another.' (p. 174)

(『ところで、お前の身分は召し使いです。もしお前がそれを正しく見るなら、それは王様の身分と同じように名誉なものなのです。お前は或るやり方で他人を助けたり奉仕したりすることになります、ちょうど王様がまた別のやり方で他人をお助けになるのと同じです。』)

Gaskell はこれを Sally が教訓として大切にしていることに何の疑問も差しはさまない。むしろこれは亡き Mrs. Benson のというより、作者の教訓でもあるからだ。

しかしこうした教訓を作品中で他ならぬ召し使いが口にするということの中には、作者の言い訳の姿勢が認められる。A. L. Morton は William Morris が一通の手紙で召し使いに何気なく言及した部分を次のように分析した。

モリスが社会主義者であることを自覚するよりかなり以前に書かれたこの手紙には、『無可有郷だより』の萌芽が、すくなくとも「召し使いもいない」というさりげない言葉のうちに、すでにあきらかである。下層中産階級以上の階層にとって女中など当然のこととしか考えられなかった1874年において、裕福な人間にこのような考えの生じたことがいかに革命的であったが、今日理解することは必ずしも容易ではあるまい。だがモリスは、すでに、条件の不平等が本来人間にとってなんら価値なく、搾取者も被搾取者をもひとしく墮落させるものである、という思想に近づきつつあった。¹⁸

勿論 Gaskell にこのような思想との直接の類似が認められるというのではない。しかし Sally が生涯召し使いでいることの理由は、やむを得ないものとして繰り返し作品中で述べられる。それは彼女が子守りの時にうっかり Master Thurstan に生涯のけがを負わせてしまったからという理由である。つまり Sally は現実には無条件で“that station of life unto which it has pleased God to call you”(p. 174) (神の御意にかなったこの世での身分) としての召し使いでいることに納得しているのではなく、それなりに「合理的な」理由で召し使いの身分に甘んずることになっている。「下層中産階級以上の階層にとって女中など当然のこと」と Gaskell が考えていたとしても、こういう一種の言い訳を必要と考えるところは彼女が必ずしも David Cecil の言うように「彼女は飛べなかったのと同様、ヴィクトリア朝の基準に何の疑問も感じるこ

とができなかった」¹⁹というわけではない側面を、読者にかいま見させるのだと思う。²⁰従って、作者の世界観については、それが作品世界を拘束する限りにおいて我々は批判していけば良いのだと思われる（尚、この点については〔IV〕で改めて考えてみたい）。

2.

Ruth が婦人服製造業者の店で徒弟奉公をしている時の無知で天真爛漫なことについては、「彼女の罪にはいわゆる情状酌量の余地が余りにも多すぎる」²¹という非難を受ける程に慎重に描き込まれている。たとえば“Ruth (a child in years herself)” (p.21) (ルースは、彼女自身が年だけいった子供のようなものだった)と形容されているし、彼女の無知な状態についても

She was too young when her mother died to have received any cautions or words of advice respecting *the* subject of a woman's life ... Ruth was innocent and snow-pure. (p. 43)

(彼女は母が死んだ時余りに幼かったので、女性の人生に於るあの問題についてどんな警告も忠告の言葉も受けることはできなかった…ルースは無知で雪のように純粋だった。)

と描写されている。

しかし彼女がこの無知や適切な助言者の欠如とだけから犠牲者に転落するのではない、ということは重要である。作者は同時にRuthの無知がBellinghamの誘惑に直結するだけの、別の理由をも描いているからである。一つはMrs. Masonの仕事部屋の情景を通して示される。物語が始まった日の夜、彼女は特にRuth達に容赦のない仕事を強制する。

Mrs. Mason was particularly desirous that her workwomen should exert themselves to-night, for, on the next, the annual hunt-ball was to take place. It was the one gaiety of the town since the assize-balls had been discontinued. Many were the dresses she had promised should be sent home “without fail” the next morning; she had not let one slip through her fingers, for fear, if it did, it might fall into the hands of the rival dressmaker, who had just established herself in the

very same street. (p. 7)

(メイソンさんは針子達が奮闘してくれることを今夜は特に望んでいた。というのは翌日年に一度の狩猟会主催の舞踏会が催されることになっていたからである。巡回裁判開廷期の舞踏会が中止されたので、それはこの町の唯一のお祭り騒ぎであった。「間違いなく」翌朝お宅にお届けしますと彼女が約束したドレスがたくさんあった。彼女は一着も自分の手から逃がしはしなかったのだ。もしそうすれば同じ通りに開店したばかりのライバルのドレスメイカーの手にその注文が落ちてしまうだろうと恐れたために。)

従って “it won't be always as it has been to-night”(p.8) (今夜のような仕事のひどさは、しょっちゅうではない) と保障されても、住み込んでまだ五カ月に満たない Ruth にとっては

“Oh! how shall I get through five years of these terrible nights! in that close room! and in that oppressive stillness! which lets every sound of the thread be heard as it goes eternally backwards and forwards,” (p. 8)

(「あゝ、こんなつらい夜を五年間もどうしてしのぎ通せるでしょう。しかもあんな風通しの悪い部屋の、あんな押し殺したような沈黙の中で。おかげで糸が絶え間なくあちこちする時、その音がことごとく聞こえる程だわ」)

と、異常な神経の高ぶりを経験することになる。

ここで彼女が新入りのために、他の同僚の娘達とは違ってヴィクトリア朝の婦人服製造業者が針子達を扱う時のやり方に充分慣らされていないのだということに我々は気付かされる。彼女は「仕事の不規則さ、頻繁な夜業、そのために生じるめちゃくちゃな生活様式」²²にまだ無関心ではいられないのである。

それに対して “Most new girls get impatient at first ; but it goes off, and they don't care much for anything after a while.” (pp.8—9)

(「たいていの新入りの少女達が最初いらいらするわ。でもそれは消え去って、しばらくするとどんなことにもたいして注意を払わなくなるものよ。」) という先輩Jennyの忠告は、こうした不健康な生活にすっかり無気力にされた娘のあきらめを表わしている。

従って物語の始まった時点での、Ruth のこの不安定な心の状態は彼女がま

だ正常な感覚を残していること、Mrs. Mason 宅での野蛮なやり方に反発を抱くだけの気力を持っていることの証明でもある。そしてそれが、自分はここでの生活にいつも完全に満足しているのではないのだという気持ちを彼女に抱き続けさせる。しかし Ruth にとって、そして当時の婦人服製造業に従事していた針子達にとっての不幸は、こうした生活からの脱出口が現世の中ではほとんど常に見つからないということである。Ruth の場合の理想の世界は過去の思い出として表わされる。たとえばそれは “past January nights, which had resembled this, and were yet so different” (p.5) (今夜によく似ているけれどももしか余りにも違いすぎる過ぎ去った一月の夜のこと) であったりする。或いは彼女にとって真冬の “One run—one blow of the fresh air” (p.5) (ひとつぱしりか一吹きの新鮮な空気) の方が、不十分な夜食やこま切れの短い睡眠よりもまだしも人間的に思われる。

こうした現実逃避への慢性的な渴望に加えて、Ruth を Bellingham の方へ押しやった第二の原因として日曜日ごとのわびしさが加わってくる。

On Sundays she chose to conclude that all her apprentices had friends who would be glad to see them to dinner, and give them a welcome reception for the remainder of the day;... Accordingly, no dinner was cooked on Sundays for the young workwomen; no fires were lighted in any rooms to which they had access. ...

What became of such as Ruth, who had no home and no friends in that large, populous, desolate town? She had hitherto commissioned the servant, who went to market on Saturdays for the family, to buy her a bun or biscuit, whereon she made her fasting dinner in the deserted workroom, sitting in her walking-dress to keep off the cold, which clung to her in spite of shawl and bonnet. Then she would sit at the window, looking out on the dreary prospect till her eyes were often blinded by tears; (pp.33-4)

(メイソンは次のように決めてこんでいた。つまり彼女の弟子達はそれぞれ友達をもっていて、その友達が日曜日には彼女らを喜こんで正餐に喜んでくれて、その日の残りの時間も歓迎して受け入れてくれるものと。……従って日曜日には若い針子達の正餐はこしらえられず、彼女らが入り出できるどの部屋でも炉火は全然たかれなかつ

た。……

その大きな人口稠密なわびしい町に、家も友達も持たないルースのような者はどうなっただろうか？彼女は今までは、土曜日ごとに家族のために市場に出かける召し使いに頼んで、彼女のために甘パンやビスケットを買ってきてもらい、誰も居ない仕事部屋でそれを食べるだけで乏しい食事を済ませていた。その間寒気を防ぐために散歩着にくるまって座っていたが、それはショールやボネットを通してさえ彼女に伝わってくるのだった。それから窓の所に座って、目がしばしば涙で見えなくなるまで佻しい景色を眺めていたものだった。）

このような状態にあった Ruth の前に Bellingham が出現したのであるが、A.B. Hopkins はそれに関して次のように適切にまとめている。

ルースは無知から誤ちを犯すのだけれども、それはまた彼女の意志の弱さのせいでもある。彼女の誘惑者となるあでやかな若い紳士との交際は、自分を危険物へ導くかもしれないというかすかな懸念が起こるが、それは彼女の情熱の強さによって消散させられる。ベリンガムへの彼女の従順さは、彼女の職業のわびしさや鍛錬と、恋の魅惑・美・物質的なぐさめとの間の対照性という形で入念に準備されている。彼女は若く（16才である）貧しく友達も居ない。…ルースには彼の魅力と誘惑物とに反抗できる成算はない。²³

また Coral Lansbury も、

ルースは決心したり決定したりすることのできる娘ではない。…ルースは夢の中に逃避してしまい、現在という瞬間を越えて見通そうとしないのだ²⁴

と、彼女が人格的欠如のせいではなく現実逃避の一手段として Bellingham に引かれていく過程を必然的なものとして分析している。

確かに Ruth が Bellingham にだまされる直接の契機には多くの偶然が付随していることは事実である。Old Thomas の妻 Mary の忠告が間に合わなかったこと、機嫌の悪い Mrs. Mason に出会ったこと、そして宿の亭主が表の扉の所でいつまでもパイプを楽しんでいたこと等々。しかし Ruth のような娘の置かれていた状況全体は、“Ruth went on her way, all unconscious of the dark phantoms of the future that were gathering around her”(p.51)（ルースは彼女の回りに集って来ている未来の暗い幻影に全く気付かずに自分の道を進んでいた）という記述を充分納得させるものである。

このような現実逃避の気持が彼女を Bellingham に近づけたということは本

当であるが、しかし同時に Ruth は最初から、Bellingham の世界とは相入れない或る種の誠実さをも持った人物として描かれている。たとえば Mrs. Mason の店の非人間的な扱いに慣れることのできないのは、Ruth の無経験のためであるということは先に見たようにその通りであるが、一方では彼女のこの誠実さのためでもある。Mrs. Mason が舞踏会場の控えの間に連れていく針子として、その美貌のために Ruth を選ばうとした時、“the most diligent”(p.7) (最も勤勉な人) が特権として選ばれるはずだったことで、彼女は“‘But as I was not diligent I ought not to go, ma’am’”(p.10) (「しかし私は勤勉ではなかったのだから行くべきではありません、奥様」) と申し出る勇気を持っている。

こうした Ruth の個性は後に彼女を自覚的な女性に成長させ得る可能性として示され、Bellingham にさえ (それを理解させはしないけれども) 感じさせるだけの力強さを持っている。Bellingham は Ruth について次のように考える。

He did not know why he was so fascinated by her. She was very beautiful, but he had seen others equally beautiful, and with many more *agaceries* calculated to set off the effect of their charms.

There was, perhaps, something bewitching in the union of the grace and loveliness of womanhood with the *naïveté*, simplicity, and innocence of an intelligent child. (pp.32-3)

(彼は何故彼女にそんなに魅せられるのかわからなかった。彼女は非常に美しかったが、他にも同じように美しい女性を彼は見たことはあったし、更に、彼女らは魅力の効果を引き立てるよう計算された、多くの媚態を身につけていた。

多分聡明な子供のような純真さと無邪気さと天真爛漫さをそなえた女性の、優雅で且つ愛らしいところに魅力的な何かがあったのだ。)

このように Bellingham が Ruth の魅力を自分の属する階層の女性とは異質のものだと感じるということは、彼らが初めて出会った時にも示されていた。

... the kneeling figure, that, habited in black up to the throat, with the noble head bent down to the occupation in which she was engaged, formed

such a contrast to the flippant, bright, artificial girl, who sat to be served with an air as haughty as a queen on her throne. (p.15)

(彼女(ルース)のひざまづいた姿、それはのどまで詰った黒い服を着て、美事な形の頭をその従事している仕事のためにかがめていた。そしてまるで王座に座った女王のように傲慢な態度で用をさせるために座っている軽薄な元気の良い気どった少女(ダンカム嬢)と非常な対照をなしていた。)

この対照性は勿論 Bellingham にとっては、単に情婦にしようと思っている女性と、正式な結婚相手になり得る女性との対照性として映っている。しかし作者はこの文章から、Ruth の誠実さと Miss Duncombe の軽卒さとの対照を意図しているのだということが読者に伝わる。

Ruth は Mrs. Mason 店での仕事に非常に勤勉であるとは言えないが、それは彼女が本質的に労働を嫌悪していることを意味するのではない。そしてそれは彼女が洋裁の仕事より病人の看病の仕事に向いていたのだと表現されている。Lansbury は Ruth が後に遂げた成長を「変身」ととらえ、Ruth の長所を「生来のものではなかった」²⁵と述べているが、作者は若い頃の Ruth にも後の一層の成長を可能にするだけの性質を与えているのである。だから Ruth が最終的に Bellingham と London に行くことも、決して彼女の責任ではなく描かれている。彼の企みと偶然とによってそうなるのである。

Ruth の人生に成長を跡づけようとしている批評家の一人 Angus Easson は、

彼女はベリンガムを愛する前には可能性を持っている。それはもし彼女が墮落しなかったら表面に現われたであろう。しかしウェイルズではルースはもしベンソンが側にいなかったなら死んでしまったかもしれず、せいぜいよくて、ベリンガム夫人が勧めたように売春婦更生所に入った程度だっただろう²⁶

と、彼女の生来の可能性を認める一方で、それが Bellingham との生活のために一旦圧殺されたと解釈している。しかし Ruth はこの Wales での生活に於ても、Bellingham の影響を受けたというより彼とは相変らず対照をなしたままでいることが示されている。その典型的な表われは、自然に対する両者の反応である。Gaskell の小説に於る自然描写の素晴らしさは一般に多くの批評家達の認めるところであるが、*Ruth* に関しては Arthur Pollard の次の分析が正しいように

思われる。

たいていの場合…背景は登場人物達の感情を反映したり対比したりするために使われている。…雨に対する二人の違った反応によって、ルースとベリンガムの性格の対比、つまり彼女の幸福で無邪気で素直な性質と、彼の退屈して怒りっぽい不平不満な態度との対比をギaskell夫人が強調しているのはそういう（登場人物もそれに気付いている）一例だ。²⁷

同じ自然現象に対する二人の反応の相違が（Pollard の言うように）彼らの性質の相違を象徴すると同時に、更にこの場面での自然への Ruth の傾斜は、彼女の人間的な感情の一つの発露となっているということは重要である。つまり彼女にとって自然とは、Bellingham との生活が内包しているものの対立物なのである。

Their breakfast-hour was late, in accordance with Mr. Bellingham's tastes and habits; but Ruth was up betimes, and out and away, brushing the dew-drops from the short crisp grass; the lark sung high above her head, and she knew not if she moved or stood still, for the grandeur of this beautiful earth absorbed all idea of separate and individual existence. Even rain was a pleasure to her. (p.64)

（彼らの朝食の時間はベリンガム氏の好みと習慣に従って遅かった。しかしルースは早く起きていてそれも遥かに早いので、生き生きした丈の低い草の露の雫をはらいつつ通って行った。ひばりが頭上高くで鳴き、この美しい大地の壮麗さが別々に個々に存在するあらゆる観念を一つにしてしまうので、彼女は動いているのか立ち止まっているのかさえわからなくなる程だった。雨でさえ彼女には喜びであった。）

景色の良い地方を旅行して回ったり、お金をふんだんに使うことによって宿で思い通りに振舞うこと、朝は遅く起き出し雨が降れば一日中トランプをし、それを楽しめない者を “stupid, not so good as a dummy” (p.65)（馬鹿で人形にも劣る）と怒り出すような Bellingham の生活—それは〔Ⅱ〕で見たようにブルジョアジーの生活でもあるのだが—には Ruth はなじめないのである。

She left the room with a feeling of relief;...The open air, that kind of soothing balm which gentle mother Nature offers to us all in our seasons of depression, relieved her. (p.66)

（彼女はホッとして部屋を出た。…戸外の空気、つまり我々が憂うつになる季節に我々皆

にやさしい母なる自然が与えてくれる、あのなだめるような芳香が彼女を安心させた。)

従って Wales で彼女が自然の中にしか安心感を見い出せないということは、彼女の人間的な誠実さを、そしてそれが Bellingham との生活を通して破壊されてはいないということを示すものである。

それに対して、この Ruth の姿を Mrs. Bellingham は次のように観察する。

This was the girl, then, whose profligacy had led her son astray; had raised up barriers in the way of her favourite scheme of his marriage with Miss Duncombe; nay, this was the real cause of his illness, his mortal danger at this present time, and of her bitter, keen anxiety. (p.84)

(それではこれが、その不品行のために彼女の息子を惑わせた娘なのだ。そしてダンカム嬢との息子の結婚という、彼女の気に入っていた計画の途中で障壁を設けたのだ。いやそれどころか、現在は彼が病気になり、致命的な危機に陥っている真の原因であり、彼女のつらい身を切るような心配事の真の原因なのだ。)

そして彼女が Ruth に与える次の手紙の文章は、息子を誘惑されたと信じる母親の立場だけでなく、その後の Ruth が遭遇する世間の見解を代弁している。

"My son, on recovering from his illness, is, I thank God, happily conscious of the sinful way in which he has been living with you. By his earnest desire, and in order to avoid seeing you again, we are on the point of leaving this place; but, before I go, I wish to exhort you to repentance, and to remind you that you will not have your own guilt alone upon your head, but that of any young man whom you may succeed in entrapping into vice. I shall pray that you may turn to an honest life. ..." (p.91)

(「私の息子は病気から回復し、ありがたいことには、あなたと暮してきた罪深いやり方について幸いにも自覚するようになっていきます。彼の強い希望によって、そしてあなたに二度とお会いするのを避けるために、私達は今ここを出発しようとしています。しかし出かける前に、私はあなたに懺悔するようにとお勧めしたいのです。そしてあなた自身の罪についてだけあなたに責任があるのではなく、あなたが悪に誘い込むのに成功するどんな青年の罪の責任もあなたにあるのだということを思い出すようお勧めしたいのです。私はあなたが正直な人生に戻るようお祈りしています...」)

従って Ruth が果して罪を犯したことになるのか否かというような設問は、この Mrs. Bellingham の見解を認めた場合にしか問題にならない。何故なら作者は Ruth のこの時期までの姿を一貫して犠牲者として描いているのであるから。

3.

Ruth が自殺の意図を放棄し生きることを決意した時に、すぐ生活費を稼ぐことを考える場面は、Ruth がその後どういう人生を送るつもりでいるかを十分に暗示している。

“She asked me, how much I thought she could earn as a dressmaker, by working very, very hard;...she thinks of taking lodgings—very cheap ones, she says; there she means to work night and day to earn enough for her child.... Her utmost earnings would not be more than seven or eight shillings a week, I’m afraid;...” (pp.122—3)

(「彼女は一生懸命働いたなら自分がドレスメイカーとしてどれ位稼げるとするかと私(フェイス)に尋ねたのです。...彼女は下宿しようと考えているのです——大変安い所だと言っています。そしてそこで彼女は子供のために十分なだけ稼ぐため、日夜働くつもりなのです。... 残念ながら彼女の最高の儲けでも一週七・八シリングより多くは無理でしょうね。」)

一方 Mrs. Bellingham は “the worst of these kind of connections... All sorts of claims... and all sorts of people to step in to their settlement” (p.105) (この種の結びつきの中で最悪のもの… あらゆる種類の要求... 彼らの和解に介入してくるあらゆる種類の人々) の干渉などを、Ruth が彼女達に提示してくるのではないかと恐れた。つまり Bellingham との接触によって生じたあらゆる結果の責任を、Ruth が果てしなく続く金銭的要求を出すことによって償わせようと求めてくるのではないかと心配した。

しかし Ruth はそうした生き方を最初から全く考えてもいないのだ。彼女は彼らが50ポンドの手切金を送って寄越した時でさえ, “I should like to return this money.... I have a strong feeling against taking it.” (pp.125-6) (「私はこのお金はお返ししたいのです。... それを受け取りたくないと強く

感じるのです。」) と言うのである。そして Bellingham が以前に与えた懐中時計 (それについては “... remembering the way in which Ruth had spoken of the watch, she felt what a sacrifice it must have been to resolve to part with it.” (p.128)(ルースがこの時計のことを話した時の話し方を思い出すと、それを手離そうと決意するにはとても大きな犠牲が払われたに違いなかったとフェイスに感じさせた) と描写されているが) その時計でさえ, “to pay the doctor, and the little things she has had since she came” (p.128)(医者への支払いをしていただくために、そしてここにやっかいになって以来自分のためにかかったものの支払いのために) 売ってきてくれるよう頼む程である。彼女は自分で働いて生きていくことを、ここでも全く当然視している。Ruth のこの生き方は、Mrs. Bellinghamの懸念とは全く無関係であるだけ、この二人の人間的な質の相違を鮮明にする。Gaskell はそれを作品中では Benson 達のように “virtue” を持った人物と “the outward accidents of wealth or station” (p.102) (富や身分という外面の生まれ合わせ) を持った人物との相違として表現している。そして Ruth の “virtue” は “It is almost impossible to help being kind to her; there is something so meek and gentle about her, so patient, and so grateful!” (p.123) (「彼女に親切にしてやることを押えるのはほとんど不可能です。彼女には何かしら大変柔らかなやさしいもの、大変がまん強くて快いものがあるのですから」) と、Faith (Miss Benson) によっても確認されるのである。

Ruth が Benson 家で暮すようになって、働くことによって自分と子供の生活費を稼ぐという Ruth のこの考え方は変わらない。むしろ一層具体性を持ったものとなる。彼女は Leonard の誕生後すぐに自活する道を探求する。

any poor cottage where I might lodge very cheaply, and earn my livelihood by taking in plain sewing, and perhaps a little dressmaking (pp.170-1)

(どんな貧しい家でもいいのですが、大変安く住み込めて簡単な縫いものや多分ち

よったした服の仕立てを引き受けることによって私の生計を立てられるような所へ移ろうと思っていますと。

彼女のこの生来の誠実さが、Mr.Benson による彼女の知的関心の開発によって、一層彼女を洗練された者へと鍛練していく。

Her mind was uncultivated, her reading scant; beyond the mere mechanical arts of education she knew nothing; but she had a refined taste, and excellent sense and judgment to separate the true from the false. (p.176)

(彼女の精神は陶冶されていず、それまでの読書量はわずかなものだった。単なる家庭のしつけ以上には何も知らなかった。しかし彼女は洗練された好みを持ち、まやかしのものから真実なものを区別するすぐれた感覚と判断力とを持っていた。)

Her tutor was surprised at the bounds by which she surmounted obstacles, the quick perception and ready adaptation of truths and first principles, and her immediate sense of the fitness of things. (p.185)

(彼女の教師(ベンソン氏)は彼女が障害を乗り越える跳躍力に驚いた。また真理や第一原理を素早く認識する力、それにすぐ適合していく力、そして物事本来の筋道を即座に感じとる力に驚いた。)

このように彼女の成長を跡づけることによって、Ruth が Bradshaw 家に家庭教師の職を見い出すのを(Bellingham の予想に反して)自然なこととして描いている。²⁸

Ruth に最初反感を抱いていた Sally に、自分の髪を切らせた時の“Ruth’s ... dignified submission”(p.144) (ルースの威厳のある服従) や、Bradshaw がモスリンを贈ってきた時それを送り返そうとして言う Ruth のせりふ、“‘I feel as if Mr. Bradshaw had no right to offer it me.’”(p.155) (「ブラッドショー氏はそれを私に提供する、どんな権利も持っていないと思うのです。」) という調子の中には、Ruth が自分の過去の経緯にもかかわらず、自分の生き方に決して卑屈になってはいないことを示すものが含まれている。彼女は Bellingham との不正常な生活を後悔してはいるけれども、彼を愛したこ

と自体には何ら恥じるものは感じていない。²⁹ この点での Ruth の自信は *The Scarlet Letter* に於る Hester の威厳と大変似かよっている。Easson が「ルスは... その悲劇的威厳、崇高さ、克己等の点でヘスタに似ている」³⁰ と言う時、このことをも意味していると思われる。(しかし Hester の場合とは異なって、Ruth の相手の Bellingham は Ruth に愛されるだけの価値を持たない男性であった。そのため *Ruth* の悲劇は *The Scarlet Letter* より悲惨なものとなっているのである。)

従って彼女が Donne と改名した Bellingham に再会した時“‘Oh, my God! I do believe Leonard’s father is a bad man, and yet, oh! pitiful God, I love him;’” (p.271)(「おゝ悲しいことだ! 私はレオナードの父が悪い人だと信じているのにそれでも私は彼を愛している」)と苦しむのは全く当然である。しかし彼女は Donne の本質を見抜いていくにつれて、こうした種類の苦悩からは徐々に解放されていく。

She looked up straight at his face; ... She had seen him. He was changed, she knew not how. In fact, the expression, which had been only occasional formerly, when his worse self predominated, had become permanent. He looked restless and dissatisfied. (p.275)

(彼女は彼の顔を真直ぐに見上げた。... 彼女は彼を見てしまったのだ。彼は変っていた。どのようにかは彼女にはわからなかったけれども。実際、以前は時折彼の悪い性質が優位を占める時だけに表われたような表情が、今ではいつも浮かべられていた。彼は落ちつかず何か不満を持っている人のようであった。)

He spoke in a tone of soft complaint. But he himself had done much to destroy the illusion which had hung about his memory for years, whenever Ruth had allowed herself to think of it...and Mr. Donne, even while she had to struggle against the force of past recollections, repelled her so much by what he was at present, that every speech of his, every minute they were together, served to make her path more and

more easy to follow. (p.281)

(彼は低い不平の調子で話した。しかしそのことによって、ルースがここ数年うっかり考えてしまうような時には彼の思い出と共にいつも浮かべていた幻想を、彼自ら壊してしまうのに大いに手を借したのだった。… 彼女が過去の思い出の力に抗して闘わねばならない程彼に対して気弱くなった時でさえ、ダンの現在の姿は余りにも彼女を不快にしたので、彼が話せば話すだけ、そして彼らが一緒にいればいるだけ彼女にますます我が道を楽に進ませてくれたのだった。)

こうして遂にはDonne のどんな誘惑にも耳を借さず、むしろ彼を軽蔑するようになっていく。Lane の言うように「彼女は彼を自分の子供の父と決して認めることができないと知るに充分なだけ、かつての恋人の破廉恥な性質を知ってしまったのである」³¹。このRuth の心理の軌跡は「宗教的な信念から獲得した勇気」³²などという抽象的なものではない。「彼女の子供への献身」³³のためという没我的なものでもない。彼女は Donne を誇りを持って愛していたし、再会した時点でもなお彼を愛していると思っていたのである。しかし彼が具体的に示すあつかましさや身勝手さ等が、自分と彼との距離を今回は彼女にはっきりと認識させたのである。

“I do not love you. I did once. Don't say I did not love you then! but I do not now. I could never love you again. All you have said and done since you came with Mr. Bradshaw to Abermouth first has only made me wonder how I ever could have loved you. We are very far apart.” (p.299)

(「私はあなたを愛していません。私は以前は愛していました。その時も愛していませんなどと言わないで下さい。でも今は愛していません。再びあなたを愛することなど決してできませんでしょう。あなたが初めてアベルマウスにブラッドショーさんと一緒に来られて以来、あなたがおっしゃったりなさったりしたすべては、かつてあなたをどのように愛することができたのかを私に疑わせるばかりでした。私達は非常にかけ離れてしまっています。)」

これは最初から存在していた Ruth とDonne との間の人格的な相違を、Ruth が認識するに充分賢明に成長したこと、更に最初からのこの相違をより大きな相違にするだけの力強さを彼女が身につけてきたことを示している。つまり

この七年という年月が、最初はほとんど気付かれもしなかった二人の差を、非常に鮮明な対照として見せたのである。この対照性が作品中で最も劇的にそして象徴的に示されているのが、〔Ⅱ.〕でも触れた、この砂浜での場面なのである。この場面は、Cecil の「もし彼女（ギaskell）が村のお茶の会について描くとそれはまさに村のお茶の会だけのものである」³⁴という非難がいかに誤っているかを示す一例である。そして““Oh! what a changed person you are from the sweet, loving creature you were !” (p.294)（「あゝ君はかつてのやさしい美しい人から何と変ってしまったことだろう！」）という Donne の驚きは Ruth のこの成長の大きさをよく示している。

このように成長した Ruth にとって、偶然のことから彼女の前歴が暴露されたとしても、そのこと自体は彼女にたいして本質的に大きな衝撃は与えないと言える。実際この後の小説の展開には Ruth のそれまでの有り様を変えるような大きな変動は彼女には起こらないのである。彼女は Hester がそうなったように最終的には町の誇りになるのだが、ここまで来ている Ruth にはそこへの到着も後ほんの一步で済むのだからだ。

むしろ作者は Leonard の将来の生き方にどのような解答を与えたらよいのかの点で迷っているように思われる。彼に対しては Mr. and Mrs. Farquhar からの学費提供の申し出を初め、医者 of Mr. Davis の養子縁組の申し込みなどかなり具体的な提案が次々となされることになっている。しかし Ruth はそのどれに対しても肯定的返事を与えない。“for her boy's sake, she had longed for a larger opening—a more extended sphere”(p.295)（彼女は息子のためにより大きな好機を——より広い活動範囲を切望していた）にもかかわらず、彼の将来を心配する人々にはただ、“I have no plan, ... All I can do is to try and make him ready for anything.” (p.431)（「私には計画などありません。... 私のできることといえば彼が何になってもよいように用意しておこうとするだけです。』）と答える。

これは作者が Leonard の将来には明確な答が出せなかったことを示している。だから、物語の最後に Donne が申し出る教育費の提供には勿論作者は Benson を通して断固反対しているのだけれども、彼女は Leonard の将来をどういう方向に向けておこうとしたのかは不明なままに小説を終えているのである。Leonard は（Richard の恐れたように）Farquhar と工場の共同経営者になるのだろうか？それとも医者になるのだろうか？この点で作者は決定できなかったのである。何故ならいづれにせよ Leonard にはかなり安定した生活が保障されていることになり、³⁵これは Ruth のテーマとも、そして当時の私生子と暴露された立場の子供の人生とも相入れないものを作者は感じたのだと思われるからである。

当時の私生子の生涯は、Mr. Davis の場合はむしろ例外であり（彼の場合は秘密が守られたためでもある），“he went to sea, and was drowned”(p. 120)（水夫になり溺れて死んだ）と描写される私生子 Thomas Wilkins や，“that poor little thing, forced back on the mother who tried to get quit of it”(p.147)（その子から逃れようとした母親に強制的に戻された、（アイルランドの浮浪人 Nelly Brandon の）かわいそうな子供）の立場が、むしろ大半であったと思われる。そういう現実の中で Leonard が工場主になったり医者になったりすることになれば、Ruth の Donne 対するせりふ “‘I would rather see him working on the roadside than leading such a life — being such a one as you are.’” (p. 300)（「私は彼がそのような人生を送る——あなたのような人間になる——よりは、路傍で働いてくれるのを見る方がましです。」）のニュアンスとも、余りにもそぐわないものとなったことであろう。

4.

Ruth の死については[II]でも触れたのだが、ここで再び Ruth の側から考え直してみたいと思う。

これまで最も多い解釈は Ruth には「何らかの懲罰無しには救済が与えられ

ない」³⁶という、当時の状況を作者が踏まえて結末をつけたというものである。もっともこの解釈をとる批評家達の意見にもいろいろなニュアンスの差があり、一方では

『こういう抗し難い屈服(死)が、世間の判断であるべきだとも思わないし、同様に、惑わされただけで本当は何の罪も犯していない娘の魂の結末であるべきだとも思わない』

… こういう非難にはすでに述べたたった一つの解答しかあり得ない。つまり社会の習慣の重みが余りに作者を圧迫したので、彼女(作者)は彼女の描いているように、はっきりとそれを無視できなかったのである。³⁷

というように、ヴィクトリア朝のRuthのような立場の女性に対する偏見の強さを改めて認識させようとする解釈がある。

また他方には、「彼女が自分の限度を越えて書いた」³⁸ために、その力量不足が露出されたと見る見方がある。たとえば Ganz は

宗教上の浄化の問題に比べれば、世間の非難など比較的軽い意味しかないのだとこれまでずっと作者は強調してきたので、このままではルースが社会的に復帰できたばかりでなく宗教上も無傷になったのだと我々に確信させ、そのことによってルースを罪の悪夢から解放させてしまうことしかできなくなるだろう。それでルースを気高い死… で死なせることによって作者はそういう大胆な主張が必要となることを避けているのだ。³⁹

と述べ、「彼女の本能的な衝動と、社会の因襲や宗教上の拘束が強要するものとの間のあつれき」⁴⁰が、いつも決定的瞬間になると彼女に「本能的な衝動」の方を譲歩させてしまうのだと解釈している。

いづれにせよこれらは、Ruth は神の前では依然罪人であり、それは死によってのみ購われるだろうという考えを作者が取り入れて、Ruth の死を準備したのだと見做している。だから作者が作品の中で実際に、Ruth の若い時の行為を最後まで罪と描き、その罪の故に彼女が死ぬことになっているのでなければ、これらの解釈は成り立たないことになるだろう。果して作者がそのように描いているか否か、以下に少し検討してみたい。

確かに作者は Ruth の過去を罪という言葉で表現している。そしてそれはヴィクトリア朝社会が Ruth を非難する時の罪の意味ではなく、神の前での罪と

いう意味で使っているのだと気付かせる。この作者の見方を作中で一貫して示しているのが牧師の Benson である。彼は Ruth と Bellingham との関係を知った瞬間でも全く偏見の無い目で彼女を見得る、作中唯一人の人物として登場している。その彼（作者の代弁者と言えるだろう）はしかし現世的な Ruth の救いについてはむしろ無力である。いかに彼女の罪が神の前だけの罪だといっても、「現実には生きた人間たち」は実際にこの世で生きていき、現実の社会によって直接判定を下されて生きていかなければならないのである。

これを彼に代ってなすのは妹の Faith である。たとえば “‘now, could she not go into quite a fresh place, and be passed off as a widow?’” (p.121)（「ところで彼女は全く新しい環境に入って、（未婚の母ではなく）未亡人を通すことはできないかしら？」）と提案するのは彼女である。この具体的な提案に対して作者は次のように注釈を加える。

Ah, tempter! unconscious tempter! Here was a way of evading the trials for the poor little unborn child, of which Mr. Benson had never thought. It was the decision—the pivot, on which the fate of years moved; and he turned it the wrong way. (p.121)

（あゝ誘惑的な考えだ。こっそりやって来る誘惑だ。かわいそうなまだ生まれていない子供に対する試練が避けられる方法——そしてそれについてはベンソン氏が思いもつかなかった方法がここにあった。これは一旦決められたら今後何年間かの運命がそれに基づいて進展する枢軸だった。そしてそれを彼は間違った方へ向けたのだ。）

ここで作者は“of which Mr. Benson had never thought” と表現することによって、この嘘の設定についての彼の責任を免罪している。そして同時にこれを“tempter” ととらえ、Benson がこの誘惑に陥って運命を “the wrong way” に向けたと描写することによって、つまりこれは神の目から見れば勇気の無い、誤った選択だったという評価を与えることによって、作者はこの選択に対する自己弁護もしている。しかも Faith がどう見ても兄より人格的に劣った人物と描かれ、“I do think I’ve a talent for fiction, it is so pleasant to invent, and make the incidents dovetail together” (p.149)（「私は作りごとをする或る種の才能があると思うわ。事件をこしらえてそれをぴった

りつなげることはとても楽しいことよ」) という言葉によって、この計画に於る Faith の責任が (そして彼女の軽薄さが) 一層強められ、Mr. Benson の (そして作者の) 責任はますます回避させられている。

この嘘が暴露された時にもこの二人の反応は次のように描写される。 Mr. Benson は、

“I did very wrong in making that false statement at first it is such a relief to me to have the truth known, that I am afraid I have not been sufficiently sympathising with Ruth.” (p.358)

(「私は最初にあの虚偽の供述をした時非常に間違っただけをしたのだ。... 真相が知れて私は非常にほっとしたので、ルースに充分同情してこなかったのではないかとさえ思われる程だ。」)

と述べる。そして神はどんな罪も隠しておくことを望まないこと、暴露は “the reasonable and just penance God has laid upon you” (p.353) (神が (ルースに) 課すべき理由のある正当な苦行) であると考えようとする。

それに対して Faith は次のように答える。

“No! I am sure you did not.... Ruth has had some years of peace, in which to grow stronger and wiser, so that she can bear her shame now in a way she never could have done at first.... I don't think it wrong. I'm certain it was quite right, and I would do just the same again.” (p.358)

(「いいえ、あなたは間違っていなかった。... ルースは何年間かの平安を持てたのです。そしてその間より強く、より賢明になったのです。だから彼女は最初は決して耐えることができなかっただろうが、今では恥辱に耐えられるのです。... 私はそれが間違っていたとは思っていません。全く正しかったと確信しています。だからもう一度そんな機会が起っても私は全く同じようにするでしょう。」)

作者はここでも明らかに Mr. Benson の後悔や反省の方を是としている。けれども作品中ではそれは余り説得力を持たない。むしろ Faith の便宜主義の方が現実に作品中でその通りに展開するので、読者に納得のいくものとなっている。そして Ruth の死後、彼女への最後の祈りの場面—— Benson が彼女の一生についてのお説教をうまくまとめられず、結局聖書中の文句 (それは描象的な

ものだ)で代用することになってしまうというエピソード——は、この Benson でさえ(そして作者も) Ruth をたとえ神の前でも罪人というよりむしろ犠牲者であったと感じていることを示している。そして、“they which came out of great tribulation” (p.453) (非常な試練を抜けてやって来た人々)の一人と形容される。

For an instant the old man looked on all the upturned faces, listening, with wet eyes, to hear what he could say to interpret that which was in their hearts, dumb and unshaped, of God's donings, as shown in her life. He looked, and, as he gazed, a mist came before him, and he could not see ... his hearers, but only Ruth, as she had been — stricken low, and crouching from sight in the upland field by Llan-dhu — like a woeful, hunted creature. And now her life was over! her struggle ended! (p.452)

(この老人(ベンソン氏)は彼の方に向けられた聴衆者達の顔を一瞬間見つめた。彼らは彼女の人生に於て神がなしたことは一体何であったのか、彼らにはぼんやりと曖昧にしかわからないようなことを、ベンソン氏が説明して話してくれるのを聞こうと、涙を流しながら耳をすましていた。彼はみつめ、そしてじっと見ていると、霧が彼の前に起こり... 聴衆者達の姿も見えなくなってしまう。ただルースの姿だけが、彼女が以前そうしていたように——ランデュ 近くの高原の牧草地に打ちしおれて身をかがめ、他人から見えないうずくまって——まるで痛ましい追いつめられた生き物のように——しているのが見えた。そして今や彼女の人生は終わったのだ! 彼女の苦闘は済んだのだ! と彼は思った。)

実際 Ruth を、どういう種類の罪人であれ、「罪人」という理由で死なせるには今となっては(Ruthの「罪」が社会的に解明された後となっては)むしろ作為が過ぎる解決となっただろう。彼女がどういう人生を送るか不明な時期に(たとえば *Oliver Twist* の Agnes のように)死なせるのならともかく、Ruth は Ruth が客観的にはどんな意味の罪人でも無いことの証明のために筆が費されてきたようなものであるのだから。そして Ruth が一人の男性を愛したことでなく、Bellinghamという男性を愛したことが、彼女の蹉跌と言え言える唯一の“a stain on my hidden soul” (p.296) (魂のしみ)であり、それ以外に彼女に非難の余地は無いというのがこの小説の全体的なトーンなのである

から。

Pollard は「物語の真実味を犠牲にしても、罪の代価は死という形で支払われねばならない」⁴¹と言っているが、Ruth を罪人として死なせる程に、この物語の真実性を作者は犠牲にしてはいない。つまり彼女の死は物語の進展上もかなり必然性のあるものとして描かれている。

Ruth の死に関して、次に考えられる解釈に、犠牲者としての死という考えがある。勿論この解釈も様々なニュアンスの差を伴ってなされている。

彼女（作者）の目的の一つは墮落した女性も充実した有益な人生を送ることができるということを示すことであった。しかしルースは立派な威厳も発展性もある主人公ながらやはり犠牲者であり、悲劇の人物にならねばならないという因襲的な考えから作者は抜け出られなかった。⁴²

若い頃のベリンガムの行為はルースに社会的な死をもたらした。彼の最後の行為（彼の病気のことだが）は、最初のこの行為をもう一度述べ直したものである。その第二の行為はルースを肉体的な死へ導いた。肉体的な死は社会的な死を述べ直したものに過ぎないのだ。ベリンガムと、彼の振る舞いを大目に見て許している社会の基準とが、いかにもう一方の人間を徹底的に破壊し尽すことができるのかを示すためにはメロドラマが必要だったのだ。⁴³

これらの考え方は Ruth の人生を正しく犠牲者のそれと捉えている点では納得のいくものを多く含んでいる。（勿論彼女が漠然と社会の犠牲者であったり男性の犠牲者であったりしたのではなく、ブルジョアジーの道徳律に支配された社会や、その具体的な体现者 Bellingham による犠牲者だったということは、〔II〕で見たように、これらの見解に補足されるべきであると思うけれども。）

ところで、Ruth がブルジョアジーの犠牲者として殺されたと見做す場合に、ここで同じような結末の小説 *Adam Bede* や *Tess of the D'Urbervilles* と少し比較して考えてみたい。後者二作の場合には Hetty も Tess も共に殺人を犯したために裁判で死刑になっている（Hetty は減刑されて島送り）。つまり二人共読者の誰もが有罪と認める殺人という行為によって最後は死刑にされるのである。従って彼女らの死はそれまでのストーリーの延長線上に無理無く用意さ

れていると言える。つまり彼女らが裁判で死刑になるということは、その判決が犠牲者としての彼女らの経歴を完了させたということになるのである。（「『正義の裁き』が行なわれ神々の長たる運命はテスを弄ぶことをやめた」⁴⁴という有名な文章はこの意味でも大変象徴的だと思う。）

ここでも裁判制度が彼女らに直接有罪と告げるということは *The Scarlet Letter* の時と同様重要である。エンゲルスの「イギリスのブルジョアは…法律のなかでも自分自身を再発見する」⁴⁵ という言葉を、まさに小説で示すものに他ならないからである。つまり本当は犠牲者なのに社会的には罪人とされることのその不合理性が、これらの小説の悲劇性を大層高めることになっている。そして彼女らは真の意味の犠牲者としてその生涯を終えるのである。

しかし *Ruth* ではこうした意味での物語の延長線上には、女主人公の死は現われてこない。“her struggle”は犠牲者としてのものであると同時に、そこから向上の時に必然的に伴ってくる苦悩でもあったからである。確かに *Ruth* の死が直接的に *Bellingham* によってもたらされるという現象の中には、彼女が彼の犠牲者であるという側面を再認識させるに十分なものが含まれている。しかし同時に、たとえば先の砂浜での場面は *Ruth* が *Bellingham* には充分抵抗し得るだけの成長を遂げていることを示すものが含まれていたのである。全くの犠牲者としての死は、むしろこの *Ruth* の成長を否定することになってしまう。

そこで第三の解釈として、我々は作者の現実性についての認識の度合いということを考えてみたい。つまり *Ruth* の成長の現実的な可能性について、である。勿論 *Ruth* が社会の偏見を被らずに生きていけたとしたら、彼女のような個性の女性が小説中で成しただけの成長は当時の社会でも十分に可能であっただろう。このことは、彼女の過去が彼女自身の何かの過失から暴露されるのではなくて、全く偶然に *Mrs. Pearson* が *Eccleston* にやって来たためであると描かれているエピソードの中にも示されている。つまり *Ruth* の人格的な価値は彼女自身の行為によって一度も裏切られることはないのである。

しかしヴィクトリア朝社会に於て、いかに誠実な個性を持った Ruth のような女性であろうと、一度社会的に抹殺された女性はその評価を全く無意味なものに変えてしまうだけの現実的な見通しがあったのかといえ、それはかなり暗たんたるものであったと思われる。Ruth の立ち直りが可能になった原因は、Leonard の誕生と Ruth の生来の誠実さに加えて、そして Ruth を最初から偏見無しに見てくれた Mr. Benson の存在に加えて、何よりも、Faith が正直に認めているように、彼女が未亡人だという嘘の設定が Eccleston でそのまま通用したということに求められる。このことをもっともらしくするために作者はたとえば “She is an orphan, without brother or sister, and with a guardian, whom... she never saw but once.” (p.122) (彼女は孤児で兄弟も姉妹も居ない。そして彼女がたった一度しか会ったことがない後見人が一人居るだけだ) と、この嘘が最も通用しやすい条件を入念に整えている。それに対して Tess には彼女に頼らざるを得ない多くの家族の存在があり、それが彼女の悲劇の一因として書き込まれている。だから多分現実の問題としては、Ruth のような後半生の展開は、この作品に於るようにすべての条件が完全に符号した時にのみ可能となり得るような、極めて実現性の乏しい生き方だと言えるであろう。

「(オーストラリアへの) 移住、自殺、売春。この三つが『立派な』階層出身の、誘惑されて捨てられた少女に残された、典型的な進路であった」⁴⁶ という Lane の文章を思い出すまでもなく、イギリス社会で立ち直れるばかりか、皆の尊敬を受けるに値する Ruth の人生は、それも Donne と正式に結婚することを通してではなく、自ら働くことを通して築かれた幸福な人生は、当時に於て作者の願望以上の現実性があったとは思われないのである。

この小説の感動は、人間的に生きようと願う一人の女性が、それを阻む様々な困難を乗り越えていく姿勢の中に求められるべきだと思うので、

読者は誘惑された女性がしばしば結構幸せに生き、皆に好かれて生きているのをよく知っている。… 不身持なことにもここに書かれている程悪いことではないと独り言を言うだろう⁴⁷

という皮肉は、この小説のテーマをひどく歪めて解釈するものである。しかしこれらの文章は Ruth が売春婦にならなかったことが非常な驚きであったという現実の一端を伝えている。

The Scarlet Letter の Hester が Dimmesdale と幸福に生きられる理想郷を、海を越えたヨーロッパの中に求め、しかもその希望も彼の死と共に実現せずに終るという筋は、作家というものが自らの理想を現実世界の中に求められない時にどういう形で作品の結末を付けるか、その一つの方法を暗示しているように思われる。Gaskell 自身も *Mary Barton* で、Mary が労働者の Jem と幸せに暮せるのは、マンチェスターではなくやはり海を越えたカナダでということにしているのだ。

このように考えてくると、Ruth の死は結局、彼女に現実性の少ない向上を描いてきた作者の躊躇であったとも見做される。つまり作者は、Ruth はやはり犠牲者として死ぬということで、現実世界の有り様と或る種の妥協をなしたのである。その妥協は（世間の非難を恐れたためというような類のものではなく）、作中でこの後何年も Ruth の幸せな生活が保障されることになっていれば、それは余りにも現実から離れ過ぎるという恐れのための妥協である。Ruth のような努力は現実には正しく受け取られず（だからこそ作者は *Ruth* を書いたのだが）、そういう意味でも Ruth は犠牲者として死ぬ方が当時の現実での姿により近かったであろう。Leonard の将来について明示できなかったと同じ困難性に、作者はここでも直面している。この困難性が小説としての解決に、Bellingham による Ruth の死を準備したのである。それに結局のところ Ruth は彼によって苦しめられ、彼女の生涯の苦悩も彼の代表するブルジョアジーの道徳律のためであることを思えば、Ruth が彼に殺されたとしても作品としての真実性にそれ程の齟齬をきたすものでもなかったわけである。

（続）

註

1. ルイ・カザミアン著『イギリスの社会小説（1830—1850）』，石田憲次・臼田昭

共 訳 (研究社, 1958), p.271 . 尚, 原著初版は1903年。

2. Cf. Hazel T. Martin, *Petticoat Rebels* (Helios Books, 1968), p.67.
3. *The Works of Mrs. Gaskell* (New York: AMS Press, 1972) , Vol. I: *Mary Barton*, pp. lxxix— x. “Three years ago I became anxious to employ myself in writing a work of fiction....my first thought was to find a framework for my story in some rural scene; and I had already made a little progress in a tale, the period of which was more than a century ago, and the place on the borders of Yorkshire, when I bethought me how deep might be the romance in the lives of some of those who elbowed me daily in the busy streets of the town in which I resided. I had always felt a deep sympathy with the care-worn men, who looked as if doomed to struggle through their lives in strange alternations between work and want; tossed to and fro by circumstances, apparently in even a greater degree than other men.... Whether the bitter complaints made by them of the neglect which they experienced from the prosperous— especially from the masters whose fortunes they had helped to build up— were well-founded or no, it is not for me to judge. It is enough to say, that this belief of the injustice and unkindness which they endure from their fellow-creatures taints what might be resignation to God's will, and turns it to revenge in many of the poor uneducated factory-workers of Manchester....

I know nothing of Political Economy, or the theories of trade. I have tried to write truthfully;”

尚, 訳するに当っては『メアリ・バートン』, 北澤孝一訳 (日本評論社) を利用させていただいた。

4. *Ibid.*, p. lxxx. “At present they seem to me to be left in a state wherein lamentations and tears are thrown aside as useless”
5. エンゲルス著『イギリスにおける労働者階級の状態』, マルクス=エンゲルス全集刊行委員会訳 (大月書店, 1978), (1), p.247. 原著初版は1845年。
6. Angus Easson, *Elizabeth Gaskell* (Routledge & Kegan Paul, 1979), p. 114. “Gaskell is the first novelist in nineteenth-century England to take a fallen woman as her central character”
7. Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel* (Kinokuniya, 1961), Vol. I, p.163. “Becky's dilemma— and Amelia's for that matter—

is the dilemma of Jane Fairfax in *Emma* and of almost all the heroines of English fiction from Moll Flanders onwards. What is a young woman of spirit and intelligence to do in the polite but barbarous world of bourgeois society? Only two courses are open to her, the passive one of acquiescence to subjugation or the active one of independent rebellion. The only hope of a compromise solution is the lucky chance of finding an understanding man like Mr. Darcy or Mr. Knightley, rich enough to buy certain civilized values and kind enough to desire them;"

尚、訳するに当っては『イギリス小説序説』小池滋他訳（研究社、1974）を利用していただいた。原著初版は1951年。

8. William Thackeray, *Vanity Fair* (Penguin Books, 1971), pp.55-8. "If Mr Joseph Sedley is rich and unmarried, why should I not marry him?... '...unprotected Rebecca determined to do her very best to secure the husband, who was even more necessary for her than for her friend."

尚、訳するに当っては『虚栄の市』、三宅幾三郎訳（岩波、1962）を利用していただいた。

9. Emily Brontë, *Wuthering Heights* (W.W. Norton, 1972), p.73. "Nelly, I see now, you think me a selfish wretch, but, did it never strike you that if Heathcliff and I married, we should be beggars?"

尚、訳するに当っては『嵐が丘』、三宅幾三郎訳（河出書房新社、1960）を利用していただいた。

10. 勿論それぞれの作家がそういう経路を進む主人公達を常に肯定していたとは限らない。たとえばその「野心」が達成されることをヒロインに妨げたり、達成されても悲劇で終えたりするという形で、それが示される。

11. *The Works of Mrs. Gaskell* (New York: AMS Press, 1973), Vol. III : *Ruth*, pp.124-5. 以下引用文のページ数はこの版に拠る。

12. シャーロット・ブロンテ『教授』、相良次郎訳（ダヴィッド社、1954）、下、pp. 227-8.

13. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë* (Dutton, 1928), p.112. "the only way of earning an independent livelihood" 尚、初版は1857年。

14. *Mary Barton*, p.7. "I'd rather see her earning her bread by the sweat of her brow, ... than be like a do-nothing lady..."

15. A.W.Ward, "Introduction" to *Ruth* (AMS Press), p.xvii. ただしW.R. Greg の意見として引用されているもの。Ward 初出は1906年。"But what we object to in her book is this: that the tone and language habitually adopted throughout, both by Ruth herself and by her friends when alluding to her fault, is at war with this impression, and with the true tenor of the facts recorded. Mrs. Gaskell scarcely seems at one with herself in this matter. Anxious above all things to arouse a kinder feeling in the uncharitable and bitter world towards offenders of Ruth's sort,...—she has first imagined a character as pure, pious, and unselfish as poet ever fancied, and described a lapse from chastity as faultless as such a fault can be; and then, with damaging and unfaithful inconsistency, has given in to the world's estimate in such matters, by affirming that the sin committed was of so deep a dye that only a life of atoning and enduring persistence could wipe it out."
16. Margaret Ganz, *Elizabeth Gaskell: The Artist in Conflict* (Twayne, 1969), p.111. "she could not have fully foreseen the artistic problems arising from the choice of a wholly innocent heroine — especially that of convincing a discriminating reader not only of the reality of 'sin' but, by inference, of the appropriateness of guilt, and the necessity of spiritual redemption and social rehabilitation in such a case."
17. *The Scarlet Letter* における Hester の苦闘は Dimmesdale も苦悩するという状況でのものであり、それだけピューリタン社会からの迫害が理不尽に思えるし、同時に Hester の情熱が神聖なものに見做され得る。しかし *Ruth* や *Tess* の場合は主人公が明らかに犠牲者として現われるのであって、毅然とした足どりで晒し台に歩む Hester のあの誇りは、彼女達には許されていない。Ganz が "Surprisingly enough, the resemblance between the two works seems hardly to have been noticed." (p.272) と述べている理由はここにあると思われる。
18. A.L. モートン著『イギリス・ユートピア思想』, 上田和夫訳 (未来社, 1967), pp.199—200. 原著初出は1952年。
19. David Cecil, *Early Victorian Novelists* (Constable, 1966), p.218. "she was no more capable of questioning these standards than she was of flying" 尚, 初版は1934年。

20. *Cranford* の Martha の描き方の中にもこの姿勢が示されている。
21. Ganz, *op. cit.*, p.110. "We think... the guilt, should not have had so many extenuating circumstances" ただし, G.H. Lewes の言葉として引用されている。
22. エンゲルス, *op. cit.*, (2), pp.94-5.
23. A.B. Hopkins, *Elizabeth Gaskell: Her Life and Work* (Octagon Books, 1971), pp.119-20. 尚, 初版は1952年。
 "Although she errs from ignorance, her weakness of will is also responsible. The faint apprehension that association with the dazzling young gentleman who was to be her seducer might lead her towards the rocks, is dissipated by the strength of her passion. Her yielding to Bellingham is carefully prepared for by the contrast between the dreariness and discipline of her employment and the lure of love, beauty and material comforts. She is young (sixteen years of age), poor, and friendless.... Ruth has no chance against his charm and enticements."
24. Coral Lansbury, *Elizabeth Gaskell: The Novel of Social Crisis* (Elek, 1975), p.57. "Ruth is not a young woman of resolution and determination.... Ruth taking refuge in dreams and refusing to look beyond the present moment."
25. *Ibid.*, p.65. "These qualities were not innate."
26. Easson, *op. cit.*, p.124. "She has potential before she loves Bellingham, which might have been realized if she had not fallen, but in Wales it seems Ruth would have been destroyed or at best gone into a penitentiary as Mrs Bellingham recommended if Benson had not been on hand."
27. Arthur Pollard, *Mrs. Gaskell: Novelist and Biographer* (Manchester U. P., 1965), p.93. "For the most part, ... setting is used to reflect or contrast with the feelings of the characters.... Such an instance is that in which by their differing response to rain Mrs Gaskell points the contrast in the characters of Ruth and Bellingham, between her happy, innocent spontaneous nature and his bored, irritable, complaining attitude."
28. もっともここには Easson が「ずるい手法」と指摘するように, 少しの不自然さが伴っているが, 小説全体のリアリティの問題として考えてみたいと思う。

Elizabeth Gaskell の *Ruth* (その2)

29. Ruth は Bellingham との恋愛は純粹に愛情の問題として考えている。従っていわゆる売春の問題とは全く無関係に描かれている。
30. Easson, *op. cit.*, p.114. "Ruth in her tragic dignity, spirituality and self-abnegation, is closer to Hester than..."
31. Margaret Lane, "Introduction" to *Ruth* (Dutton, 1967), p.x. "Ruth has learned enough of her lover's unprincipled nature to know she can never accept him as the father of her child."
32. Lansbury, *op. cit.*, p.71. "the courage she has acquired from her religious faith"
33. Hopkins, *op. cit.*, p.122. "devotion to her child"
34. Cecil, *op. cit.*, p.201. "If she writes about a village tea-party, it is just a village tea-party"
35. 医者が「中流階級の知的職業として」確立するのは19世紀の後半であると言われているし(エレン・モアズ『女性と文学』, 青山誠子訳(研究社, 1978), p.124), それ以前としてもここで問題になっている Mr.Davis は「プロフェッショナル階級」(村岡健次著『ヴィクトリア時代の政治と社会』(ミネルヴァ書房, 1980)) のどの程度のものか不明なのだが, いずれにせよ, 安定した職業として *Ruth* の中では描かれている。
36. Lane, *op. cit.*, p.vii. "there must be no relief without retribution"
37. Hopkins, *op. cit.*, p.127. "'I do not think that such overpowering humiliation should be the result in the soul of the not really guilty though misguided girl, any more than it should be the judgement of the world.'... There can be but one answer to this stricture, an answer already given; the weight of social custom oppressed the author too heavily for her to disregard it any more plainly than she did."
38. Cecil, *op. cit.*, p.233. "she writes outside her range"
39. Ganz, *op. cit.*, p.130. "Having stressed the relative insignificance of the world's judgment in the light of spiritual purification, she could only free her heroine completely from the incubus of transgression by convincing us that Ruth was not only socially rehabilitated but spiritually whole as well. By having Ruth die a saintly death — ... the author evades the need for such a bold assertion."
40. *Ibid.*, p.9. "The conflict between her instinctive impulses and the

- demands of both social conventions and spiritual commitments”
41. Pollard, *op. cit.*, p.102. “The price of sin has to be paid in death, at the cost of narrative credibility.”
 42. Easson, *op. cit.*, p.125. “Gaskell’s purpose was partly to show that the fallen woman could lead a full and useful life, yet she couldn’t escape the conventional idea that Ruth, the heroic dignified expansive creature, is also a victim, who must have her tragedy.”
 43. Martin, *op. cit.*, p.70 “Young Bellingham’s act had caused social death for Ruth. His final act, that of his illness, is a restatement of the first one. The second act leads to Ruth’s physical death. The physical death is but a restatement of the social one. Melodrama was necessary to show how completely Bellingham and the standards that tolerated his actions could destroy another.”
 44. Thomas Hardy, *Tess of the D’Urbervilles* (Norton, 1965), p.330. “‘Justice’ was done, and the President of the Immortals...had ended his sport with Tess.”
 45. エンゲルス, *op. cit.*, (2), p.151
 46. Lane, *op. cit.*, p.vi. “Emigration, death, or prostitution. These were the three classic courses open to a seduced and abandoned girl of the ‘respectable’ classes”
 47. Cecil, *op. cit.*, p.238. “He knows perfectly well that seduced young women... live, as often as not, to be very happy and very much liked....Unchastity is not as bad as all that, he says to himself...”